

「北野さん、空から石が降ってくることで話すように、田之上はそう？」

まるで今日の天気のことでも話すように、田之上はそう尋ねた。

ここは我々が事務所から徒歩三分、昼下がりのモスバーガーである。二十四時間営業なので、繁忙期には泊り込みになることも多い仕事の我々にはとても嬉しい店だ。うちのメンツは全員常連と化しているが、一見OL風の私とノーネクタイで自由業っぽい田之上、ひいき目に見てもインテリヤクザの社長が同じ会社に勤めているとは思われていないだろう。しかも、「真田探偵事務所」なんて胡散臭い名前のところだとは。

日差しがまぶしい、夏の昼である。私は目をすがめて田之上を見据え、とりあえずモスバーガーのサラダセットを三人分注文した。

ワイシャツの袖を極限まで捲り上げた田之上は何も言わずに、ぼうつと立っている。私もぼうつとする頭から、会話をする努力を振り絞ることにした。

「……ないと思う」

「だよねえ。普通、そう思うよねえ」

「そんな案件が来そうなんですか？」

保険会社の下請け調査を主な仕事にしているわが社であるが、仕事自体の受注業務は社長が一手に握っている。なので、一概に調査員の田之上より事務専門の私が案を先行して知る立場にあるということはない。

社長がまた酔っ払って、おかしい案件の依頼予定を洩らしたのか、という推測は、どうやら外れのようだった。田之上は首を横に振る。

「違うよ。ちよつとした、クイズです」

「暑いし、あんま聞きたくないんですけど……」

「まあ、そう言わずに考えてよ。空から石が降ってくる。天候は関係ない。晴れでも、雨でも降ることがある。どんな可能性が考えられるかな」

「えーと……飛行機」

「付け足しその一、昔から降ってる。今も降ってる」

「じゃ、高山からジェット気流に乗ってくるのか」

「付け足しその二、離島にも降る。島にも降る。場所は関係なし」

「ラピエタが飛んでたんじゃないすか」

「降参ね」

腹の立つ言い方に抗議しようと思ったその時、注文品とナンバーを呼ぶ声が聞こえた。細長い身体を折り曲げるように座っていた田之上は機敏な動作で立ち上がり、さわやか系お兄さん店員から茶色の袋を受け取る。

一足先に自動ドアをくぐると、そこに待っていたのは

熱そのもののような空気だった。川崎は港も近く、湿り気とも相性がいい。ヒートアイランドなどと言ったら丸の内で働く連中に叱られるのだろうが、それでも東北出身の自分にはかなり辛いものがあつた。

「……暑い」

「さっきの問題当たったら、ハーゲンダッツ奢つてあげるよ」

「そのくらい自分で買います」

「冷たいなあ」

「暑いんだもん。考えたくない」

下着までじつとりしているのがわかる。もはやためらっている場合ではないだろう、上着がわりに羽織つていたアフガンストールを解いて肩を出した。これではもう、仕事中には見えないだろう。だからといって、だらけた小学生みたいな格好の田之上が会社員に見えるかと言われればそうでもないのだが。

そのあとは無言のまま、私たちは事務所に戻った。趣味の悪いガラス張りの応接室が丸見えという、設計者の頭を疑う造りをしたこの部屋の唯一の利点は、ずばり風通しの良さだと思う。真夏でも換気扇だけで事足りるというのは、女性にとつては幸運以外の何者でもない。

独りソファで新聞を広げている社長が、おう、と手を挙げた。

「早いな。混んでるから遅いだろうと思ってたぜ」

「モス、先週値上げしたんですよ。一律二十円くらいですけど」

「そんならなら払ってやらあ。貧乏人が多いのかね、この街は」

事務所いちのモス・フリークである社長は、七百年を手渡して笑った。後ろでワイシャツをばたばたしている田之上を嫌な目で見て、アイステイにストローを刺す。

「田之上、バタバタうるせーぞ」

「すみません、何か、背中に虫入ったみたいで……うわっ、うわ、きたきた！きたっ、気持ち悪い！」

「田之上さん、大丈夫？」

口には出したものの、そんなトラブルに手を貸すほど私は優しく無い。私よりは心配そうな顔の社長につり銭を渡し、黙ってオレンジジュースを啜った。大人だもん、どうにでもすればいい。

しかし、細長い身体が極限までねじれている光景は何かに似ている。

「……割り箸、かな」

「は？」

「いや、なんでもないです。社長、空から石が降ることつてあると思います？」

「ラピュタが飛んでたんだらうな」

「……ですよね」

笑う気にもなれず、私は割り箸男から目をそらして、

サラダにドレッシングをかけた。

*

午後一時からの予定は、『田之上へ面談』となっていた。契約を結んだ保険会社からの依頼を受け、調査をするという業務を中心に行っているわが社であるが、ごくたまに調査のプロとしての腕を見込んだ相談業務も来る。保険会社が多いが、検事さんやら弁護士といった方々が裁判の参考にするという名目でやって来ることも多い。

そういった場合は、専門の知識を持っている田之上が応対するのが通常である。彼の人間性はともかく、調査は「丁寧」で「迅速」そして何より「トラブルがない」として有名であるらしい。私も幾度か彼の調査に同行したことがあるが、そのたびに驚くのは辣腕というわけでもないのに、あつという間にクライアントの信頼を勝ち取る態度と話術だ。そういうのが特技というのも、探偵業としてはどうかと思うのだが……。

カラン、とドアベルが軽い音を立てて、私は立ち上がった。来客に備えてクローラーをつけていたため、部屋の空気はひんやりと冷たい。

軽い会釈の先に、見慣れた顔が現れた。小柄でメタボ気味の体型、「ひよっとこ」とあだ名されるひょうきんな顔立ちがにっこり微笑んでいる。法廷と現場以外ならど

こでも笑顔絶やさないと言われる彼は、その笑わない時間のゆえに高名な男である。

田之上も、さすがに緊張した表情で歩み寄った。外国人のように握手を交わし、型どおりの挨拶を済ませる。

「成田さん、ご無沙汰します。また懲りずに妙な案件を持ち込んでくださるそうで……」

「ははは、そういう人を食ったようなところは相変わらずやな、田之上さん。安心せい、ほんの五分かそこらで帰つたるわ」

「そこはそれ、長居してください。僕の売りは『八方美人』でして」

「シツポ振り過ぎてヒンシユク買つとると違うか」

「もうね、揉みすぎで手のひらがすりむけそうですよ」

成田の爆笑で場が和んだところで、社長が挨拶に向かった。その隙をついて給湯室へと向かう。雑用は私の仕事というわけではないが、苦にしないでこなすせいで期待されるようになっていた。

こっそり買足したい葉をたっぷり使って、四人分のお茶を淹れる。成田さんの好みは、もうよく分かっている。十分に蒸らした葉から、何とも言えないいい香りがした。

成田さんの職業は我々と同じく、保険会社の下請け調査員である。但し、彼が田之上と決定的に違うことは、ずばり調査の信頼性だった。その信頼性の高さの根拠は、

調査対象として「交通事故」のみしか扱わないという専門性の高さに拠るものである。

科捜研をして「交通事故鑑定に成田あり」と言わしめた実力は、彼をフリーランスにするには十分だった。三年前にそれまで居た調査会社から独立し、「交通事故鑑定」の相談局を開設している。いつテレビで彼の顔を見ても、私は驚かないだろう。

そんな彼は、田之上個人のコネクションで事務所の常連となった。社長とはプライベートで飲みに行ったりもするらしいが、あまりご一緒したくない気もする。

お茶を持って、給湯室を出る。ガラス張りの応接室内では、真剣な顔をした男が二人、写真を前に黙り込んでいた。私がドアをゆっくり開けると同じタイミングで、成田さんがひよい、と顔をあげた。

「……せやけど、そんなことってほんまにあるんか。どうも簡単に信じられん話や」

「あるんですよ。さっきの条件を満たして、なおかつこの異常な状況を生み出すことが」

「でもなあ。…なあ、北野さん。あるんかな、空から石が降るなんて」

目を逸らす田之上を思い切り睨み付けたあと、成田さんに向かって首を振った。この男、まだ続けるつもりなのか。

「私も聞かれましたけど、答えられなかったんですよ。」

田之上さんの意地悪問題でしょ」

「いや、何か見落としとるに違いあらへん。そんな気がするわ、タンテイの坎みたいなもんかな」

「さすが成田さん、どんな問題にも全力投球ですね。僕も見習います」

出かけた嫌味を飲み込んで、肩をすくめる。この業種は変人が多いのも問題だ。いいおっさんが二人して話すことじゃないと思うが、少なくとも成田さんにはその考えは無いように見えた。難しい数学の問題を解こうとする学生のような目線で、宙空を見据えている。

田之上は大して楽しくもなさそうな顔をして、退出しようとする私を呼び止めた。

「北野さん。悪いんだけど、二年前にG件扱った時の資料すぐ出してもらえる？」

「出ますけど、英語ですよ。それにG件ですか？ C A件じゃなくて？」

Gという言葉の示す意味を考え、私の顔は曇ったのだろう。田之上は大丈夫、と笑い、成田さんに向き直った。

「成田さん、英語大丈夫ですか？」

「俺、もうすぐ還暦やぞ。できるわけないだろ」

「んじゃ北野さん、通訳についてもらっていい？ 緊急の仕事あるならいいけど」

構わない、と応えたものの、どうも首を捻らざるを得ない。何故？ と呟いてファイル棚に近寄ると、社長が歩

み寄ってきた。

「成田、何だつて」

「わかりません。ただ、田之上さんからG件の資料を出すように言われまして」

「はあ？ G？」

鬼瓦のような顔を捻り、社長は腕組みをした。

「Gつたら、うちじゃ二年前の一件だけだろう。確か藤原組の鉄砲玉が、ライフルの改造までして誤射した案件だつて」

「結局、鉄砲玉じゃなかったって田之上さんが明かしたんじゃないんですか？ あの人、匿名で証言台まで登ったじゃないですか。嫌がらせ多くなつて、怖かつたですよね」

「ふん、田之上はあの件でハクがついたかな」

鼻白んだように笑い、社長は組んだ腕を解いた。

「G」は、うちでは「GunShot」の略称、つまり銃犯罪そのものに関する調査の分類である。アメリカ式分類をそのまま取り入れた関係で大分類に入り込んでいるが、普段は決して扱わない案件のひとつだ。

「……成田の奴、銃の痕跡でも見つけたのかね。尻に火がついてたら面白いんだが」

「それだつたら、うちには来ないでしょうね」

苦笑を交わしながらもファイルを探し出し、応接室に戻る。困った顔の成田さんと、いつもどうりポーズとし

た顔の田之上が、テーブルの写真を見つめていた。めちやくちやになつた自動車の運転席に、血まみれの男が座っている。半分目を開いているが、それは生の証ではないだろう。その姿が、角度を変えて何枚も映されている。もう一種、こちらは検死の写真なのだろう、血を拭き取られて目を閉じた同じ男が、真正面から映されたものが数枚あつた。

「北野さんサンキュー。で、どうなんです成田さん」

「うん、科捜研の調書によると、やけど。——この頭部裂傷」

検死写真の頭部、変形した部分を指差す。マンガのサブミタいに膨れ上がっているが、これは内出血のせいだろう。これが事故によるものならば、衝突以後数十分の間は生きていたという証明になる。

「こいつは車体片によるものとされている。相手のトレイラーがかなりスピード出たからな、破片がぶつかつて切れた、と」

「それにしても、裂傷がかなりの大きさですね。遺族が疑いを持つのも当然、かな」

「そんなことないよ。でもまあ、交通事故は警察も適当な扱いしよるからなあ」

ため息をつき、成田は頭を掻いた。「ひよつとこ」の目がきらり、光を放つ。

「遺族側はウチに泣きつく以外にあらへんのや。ちゃん

と捜査してくれない、型どおりの聴取だけで意図が伝わらない、あげくに冤罪や。……ああ、すまん。田之上さんはそんなん、よう知つとるわな」

「こないだ、オートバイ事故調べましたよ。五年前の事件ですけど。いや、資料がなくてね、困りました。北海道県警はお堅くて」

「警察も、交通事故なんかよりは派手なヤマ扱いたいんやろ」

成田さんは吐き捨てるように言い、お茶を飲み干した。その最中に私と目が合つて、慌てたように頭を下げる。

「ごめんな、北野さんがおるの忘れとつた。こんな生臭い話、若い女の子に聞かせるもんやないな」

「お構いなく。慣れていきます」

笑つて、写真をどけたスペースにファイルを広げる。田之上に目配せをすると、彼は珍しくも察し良さげに頷いた。

「だいたい予想ついていると思うけど、成田さんの疑惑はね、この頭部裂傷。これが、ガンショットによるものなのじゃないか、というものなわけだ。僕は否定派なんだけど、北野さんはどう思う」

「あり得ませんね」

写真をもう一度眺めて、私は即断した。素人に毛が生えた程度の私でも、この裂傷は銃創には見えなかった。科捜研の資料を手に取り、裂傷の破壊組織分布を確認す

る。

「……やはり違いますよ。この裂傷は、銃創の特徴を果たしていないと思います」

「それは、どういうことや」

「銃弾でできた裂傷には、いくつかわかりやすい特徴があるということですよ、成田さん」

私の言葉を引き継ぐように田之上が畳み掛ける。私はファイルから、とりあえず実況見分時の遺体写真とレントゲン写真を取り出した。

「まず、一番大切な特徴は、組織の破壊規模ですね。ご存知のとおり、銃弾は回転するもので……つまり、組織の内側にめりこむほど、回転軸がブレて振幅が大きくなるために大きな破壊が起こります」

私の取り出したレントゲン写真を掲げ、淡々と田之上は呟いた。被害者は頭を撃たれての即死だが、これは脳組織の破壊がかなり鮮明に映し出されている。二年前、G件を初めて扱った私は興奮したものだ。

「こりや……何というか、すごいな」

「比較するとかなり違いあるでしょ？ 銃弾の有無はともかく、レントゲンで対象物が回転していたかどうかはかなり鑑定できますよ。」

あともう一つ大切なのは、弾丸はね、熱いんです。熱反応は熟練した医者でなくとも見落とすことはまずあり得ないポイントですよ。たんぱく質は変質しやすいです

から、素人でも見分けが付きまます。それが、ない」

「ふーん……」

「最後に、ショット時の状況です。これを狙撃と考える場合ですが、犯人は一番チャンスらしい状況を待つて撃ちますね。当然。」

まあ、普通は走行中の車内を狙撃なんてコワイことしないで、降りた瞬間を撃つんじゃないでしょうか。この案件でも、被害者の民間警備会社社員は車を降りた瞬間にやられてます。だから、SPやってる人たちは絶対に警護対象を先に降ろさないですよ」

「そうかあ、勉強になるわあ」

大げさな口調だが興味なく呟き、成田さんは身を乗り出した。ファイルから抜き出した傷口の写真を手に取り、じつと見つめる。

「ドラマや映画で見るのとは大違いやな」

「傷口の外見自体はあんまりです。この案件は、大口径のライフルだったんで、破壊が大きいですけど……」

そこまですべて、田之上は困ったように口ごもった。頭を掻く彼を、成田さんが不思議そうに見やる。

「……あのですね、あまり期待を持たせたくないとか……言いたくないんですけど、失礼ですが、ミスリードをしないでほしいんですけど」

「何のことです？」

成田に代わって私が尋ねる。成田さんは笑って、まあ

まあ、と私の肩を叩いた。

「ええよ、北野さん。わかっとなるよ。俺も自分ひとりの手柄にするつもりはあらへんからね、今からちゃんと話します」

「いや、さすが成田さん話が早い。恐れ入ります」

男二人が頭を下げあうに至って、私はやっと理解した。田之上は今までに挙げた条件をクリアできる狙撃法を知っているのだろう。だが、その方法が成田の案件に合致するかわからないうちに教えてしまうのは、捜査のミスリードを産みかねない。

成田さんが福々しい顔で資料を出し、テーブルに広げた。慌ててそこにあつたG件の資料を避ける。

彼はいくつかのファイルを田之上と私に手渡し、自分はバッグの底から白いハンカチを取り出した。丁寧にたまためたそれをお茶の横に置き、田之上に向き直る。

「俺のところにこの件を持ち込んだのは、遺族なんや。事故が起こったのは二ヶ月前で、そのまま茶毘に付した、そして、四十九日も過ぎた今更になつて……他殺の可能性がある、と言うんや」

「根拠のあることなんですか？」

「ある。警察には言えなかつたらしい。そりやそうだな、少なくとも建前上は厳正な捜査のうえ、事故やつたと確定した事項や。保険金も下りると、相手側のトレーラー運転手の有責が認められて示談も済んどる。」

でもな、……火葬の後、お骨を拾ってたら、こんなもんが出てきたって言うんや」

成田さんは一息つき、太い指で白いハンカチを開いた。それは一見、パチンコ玉に見えた。個人的にはあまり縁のない遊びだが、恐らくその印象は大きく外れていないだろう。銀色の小さな玉が、真っ白なハンカチの真ん中に鎮座している。

田之上は成田さんに目配せをし、その玉を摘み上げた。

「……金属片、ですね。きれいな球形の」

「パチンコ玉みたいやろ？ それで、頭蓋部分から出てきたそうや。その時は不思議に思わなかったらしいけど、な、四十九日も終わってほっと一息つこうとしたら、気になつてしゃあない、と。そこでタウンページで俺の事務所調べて、電話かけてきたってわけなんや。

事故については、今渡した資料に詳しい。特に機密でもないし、コピーやから差し上げます。国道X号線のカートを曲がりきれなかったトレーラーのセンターライン越えが直接原因の、単なる衝突事故や。保険会社の調査は入ってないけど、今回は科捜研の資料に問題があると思えんのや」

「成田さん、現場に行かれたんですか？」

「俺の信条は現場百ペンや。三回行って、トレーラーのスリップ痕から被害者との衝突地点を割り出してある。北野さんの資料のほうに入ってるから、後で見といてく

れ」

田之上の表情がぱつと輝いて、口笛を吹いた。不謹慎だが、他社の資料が手に入る機会などめったにないのだから、これは嬉しい手土産である。しかも、成田さんのそれなんて最高だ。

「喜ぶのは解決してからにしてくれ。で、被害者の身上調査やけど、それは遺族の意向で外注した。田之上さんの持つてるほうのファイルや。」

被害者は中尾雅之、五十二歳、不動産会社経営。恨みを買うアテがあるのかと家族に聞いたら、ないこともない、とのことやった。仕事に関しては家族には秘密主義だったみたいやな。調査会社に頼んだら、区画整理に関するトラブルが見つかった」

「どこに頼んだんです？」

「XXエージェンシー」

「ふーん……で、殺されるほどのトラブルだったと？」

「それはないと思いたいな。そのトラブルも、もう五年前のことや。ただし、世の中には頭のおかしい奴がおるからなあ。俺みたいな自動車屋にはわからへんよ」

「……犯人像をいかれた奴とするなら、『狙撃』の可能性は捨てたほうがいいな」

淡々と、低い声で田之上が呟いた声は、ソファにもたれかかっていた成田さんには聞き取れなかったようだ。不思議そうな顔で私と目を合わせ、肩をすくめる。

「田之上さん、今何と言った？」

「『狙撃』はありえないと言いました。僕が先ほど提案しかけたのは、ガンショットじゃなくてマーシャルアーツの可能性なんです」

「マーシャルアーツ？ パチンコのことか？」

「まあ、そんなもんです」

田之上が苦笑で応じ、両手でパチンコを打つようなポーズをとった。窓の外に狙いをつけ、見えない弾を飛ばす。

「何でも格闘技に分類されるらしいですが、詳しいことは知りません。パチンコ玉等を飛ばすので、ガンショットのような熱反応や回転痕は残らないんですが、頭のおかしい奴にできるかという……」

「できないのか。うちの息子は、三つからパチンコで遊んどったぞ」

「日本にできる人間がいるとしたら、特殊な訓練を受けた軍人とかでしょうね。二十年位前の東側では盛んだったようですが、西ではあんまりですねえ。自衛隊の必修科目でもないですから、存在自体がマイナーというか」

「……つまり、アレか。たまたま旧ソ連の凄腕軍人が歩いてて、たまたま頭のおかしい奴に素性を知られて、たまたまそいつが被害者を恨んで、たまたま軍人が殺しの依頼を受ける。……って状況じゃなきゃ、無理か」

「被害者の車、走行時四十キロ切ってないですよ？ な

ら、たまたま成功した、も入れないといけません」

しれつと言いつつ田之上は、どこか楽しそうですらある。その生意気な態度にも機嫌を損ねることはなく、成田さんは額に手を当てて笑った。

「……妄想やったな」

「そうですね。その案じゃ、いいところ妄想でしょうね」

「きついな」

「落ち込まないでくださいよ、成田さん向けの案件じゃないですから」

「……え？ どういうこと？」

ふと、奇妙な言葉を聞いた気がした。

ここはプロ同士の場、自重しているつもりだったのだが、思わず私は田之上の笑みに食いついていた。彼は何を言っているのだ？

——これは、空から降る石の話じゃないのに。

「田之上さん、ひよつとして何かわかってる？」

「……こういう仕事してると、専門家の偉大さと同時に、彼らが足元をすくわれる事態があるということも、自然と受け容れるようになるんです」

彼は私には目もくれずに、汗を拭く成田さんを見据えた。妙な迫力に気おされるように、私たちは口を噤む。

真剣な表情を崩さず、田之上は淡々と続けた。

「成田さん、僕は現場百べんができる程の調査員ではありませんが、見たものしか信じないということは

やろうとしても、できません。電話と資料の調査だけで終わらせることも多いですし、現場を一度も見ないことすらあるんです。遺族の方の心情なんか無視しますし、会社の信用のために調査をします。

まあ、僕はそんな、ろくでもない調査員ですが、でも一も二もなく信用するもののひとつくらいはあるんですよ」

にやり、女のように口角を上げて。

目の前にかざされたのは、成田さんのサインの入った資料だった。分厚いそれを誘うように振り、そつと机に下ろす。

「……はつきり言いますが、僕はあなたの鑑定に間違いは無いと思っていますよ。この傷口は鋭利で、大きい。間違いなく破砕したボディの欠片によるものでしょうね」

「しかし——田之上さん」

困った顔で反論をしようとする成田を、田之上は手を振って止めた。

「成田さん、この金属片を鑑定しましたか？ 径と重量、部品の同定くらいですか」

「あ、ああ。そうや。おおまかなサイズを測って、その結果、被害車両の部品ではないことが判明した。状況から相手トレーラーの部品ということはありえんけど、一応そつちも調べた」

「完璧です」

「今度は皮肉かい」

「調査の不足は、想定不足から起こるものです。成分鑑定はなさってないんですね？」

「やってないけど……何でやるんや、そんなん」

「弾丸ならば通常、鉛です。ですがこれは恐らくアルミニウム合金ですね」

そんなこと、見ただけでわかるのか、と質問しようとした時だった。成田の愛嬌たっぷりの目が、思い切り見開かれている。口は逆に、歯を食いしばるように引きつっていた。

小さく、くそつたれ、と呟く声は、彼のプライドが碎ける音だ。

「……わかったわ、畜生。田之上、お前さんやりよるな…… 最初からわかつたんやろ」

田之上の前に置かれた球をつまみとり、目をすがめて見つめる。銀色の光に見入る前に、彼は驚きを隠そうともせず吐き出した。

「これはアルミニウム、つまり車のボディの欠片だ。それが変形したものなんや」

「変形って…… そんなの、この事故ではあり得ないんじゃないですか？ 衝突時の衝撃がかなりあったとしても、ボディの欠片がこんなに綺麗な球形になるなんて、考えられないでしょう」

「北野さん、何も変形は事故当時に起きるとは限らないんだよ」

混乱した私の言葉を田之上が受ける。いつものぼうつとした口調で、へらへらと笑いながら。

「金属加工には基準値以上の衝撃、または融解点以上の熱が必要。——火葬だね。」

火葬の温度って何度あるか忘れちゃったけど、アルミニウムを変形させるには十分じゃないかな。そして、金属は加熱すると張力に従ってこう、球になる」

「……思いつかなかったわ。おい、田之上さんよ、あんたいつからわかってた」

ひよつとこの思わぬ詰問に、田之上は肩をすくめた。両手を上げて首を横に振り、何故か私に視線を送る。

「どうも買いかぶられてるよなあ。でも成田さん、火災を伴う事故も扱ったことがあるでしょうから、気づくのは時間の問題だったと思いますよ」

「ああ、そうやろうともよ。午後をまるまる潰して馬鹿にされに来たようなもんや」

「馬鹿だなんて思いませんよ。——いや、本心です、ホント」

苦笑交じりに頭を搔いて、田之上はそう言った。成田さんも本気で怒っているわけではないだろうに、どうしても言い訳がましくなるのは人徳というものだろうか。

たいして柔らかくもないソファが、細長い身体を包む

ように沈み込む。

「誰にでも向かないものぐらいありますよ。空から降る石を見ることができるのは、天才か馬鹿か、そのどっちかなんですから」

*

『プロフェッショナルの仕事を安易に疑っちゃあいけない』

会社を立ち上げたばかりのころ、田之上と社長がよく言っていた言葉だ。

この仕事は、言ってしまうえば警察を疑うものだ。保険会社はクライアントの意向に沿って、思わぬところに疑いの穴を空ける。その九割は外れ、残りはクライアントも警察も思いもよらぬ結末を迎える。

新たな発見をすることなどない。プロたる警察の資料は、私のような素人には想像もつかないほど綿密で、ほとんど間違いがない。

私たちの——いや、田之上の仕事は、その「ほとんど」を疑うことから始まるように思えるが、きっとそうではないのだろう。探偵業に関しては素人同然の私だが、少しでも分かった気がする。

信じることだ。彼は、信じることから歩みだすから、いつも正しい方へ向かう。

コンビニから戻って来たら、もう時計が六時を回っていた。パソコンのウインドウには、終業時刻に合わせて『お疲れ様』と書かれたダイアログボックスが表示されるようになっていた。文末にくっついたコナン君のアイコンは、社長の奥さんの手作りらしい。

クーラーの切れた社内は暑かったが、夕刻の風が通り抜ける爽快感があった。ストールを解いたらコナン君と目が合って、少し笑った。

帰る気配すら見せずにクロスワードを解いている田之上の席にそっと近寄ると、彼は顔を指で押しながら顔を上げた。電気もつけずに細かいことをしているから、眼精疲労にでもなったのだろうか。

私はその鼻先に、無言でハーゲンダッツを差し出した。

「……くれるの？」

「答えを聞かないと、帰れないでしょう」

大きな手にアイスを押し込んで、その上にスプーンを載せる。汗ばんだ指先は、驚くほどに冷えていた。

田之上は笑って、クロスワードパズルを裏返した。

「素直に聞けばいいのに。僕、そんなに意地悪じゃないよ」

「そうかしら？ 成田さん、傍から見てもかわいそうでしたよ。あのマーシャルアーツがどうこうっていうミスリードは、わざとやったんでしょう。そんなのあり得ないって、最初から知ってたくせに」

「へへ、コレ欲しかったんだよね」

彼は悪びれもせず成田さんの調査書類を指差し、その手でアイスを開封した。予想していた回答とはいえ、同僚がここまで悪いことを考えていたと思うとぞっとする。

「……この書類巻き上げるために、とぼけ続けたってことですよね」

「だって、あの傷口はどう見ても事故時の金属片によるものだよ。銃創なんて特徴的なもの、警察が見逃すはずがありません。そんなの、北野さんじゃなくても、そこからへの推理小説好きな小学生にだってわかることじゃない。

そんなのも判定できないんじゃない、足元見られてもしようがないっしょ」

「金属片による裂傷、までは正しかったのに」

「成分鑑定しなかったのは痛恨のミスだったよね」

「何で狙撃とか考えちゃったのかなあ」

自分のアイスを開封しながら、私は呟いた。愛妻家の社長は定時きっかりに退社のご様子だ。三つ買って来なかったのは賢明な判断だろう。

成田さんがメタボ腹を揺らし、笑顔で帰って行ったのはもう三時間ほど前のことだ。お人好しの顔をして、これで遺族にいい知らせができる、と田之上の手を握る様子は、自身のプライドを揺るがされた男の様子ではな

った、と思う。

彼はプロフェッショナルだ。誰もがその仕事に一目置く、本物の探偵だ。今回だって、お粗末な仕事をしていたとは思えない。

なのに、こんな若造に足元をすくわれて。

「……こんなことで悔しがってたら、それこそプロ失格だ」

「逆じゃないですか？ プロフェッショナルだからこそ、自分の仕事にプライドがあるでしょう。それが間違ってるなんて、悔しくてしょうがないと思いますよ」

「そう？」

からっぽのカップを机に置く、軽い音がする。田之上の机に腰掛けて窓のほうを見ると、直視できないくらいのおレンジ色が広がっていた。太陽はもう、ビルの谷間の向こうへと行ってしまったのだろう。

ふと、寂しい、と思った。今日の仕事はここまでだということだ。

「ネイチャー・サイエンスが学問の地位を得てから二百年、科学者は誰も、空から石が降ってくることを信じようとしなかった。神話の中には、空から石が落ちてくるモチーフがたくさんあったし、信頼できる歴史書に記されてもいたんだけどね。彼らはそれら全てを、突風による吹き上げ、鳥のいたずら、あるいは虚言のたぐいだとしたんだ。」

彼らが、その妄想を信じざるを得なくなったのは、十九世紀フランスの田舎町に、局地的に小石が降り注ぐ事件以降になる。石の成分は鉄鉱、その多くは衝突のためだけではない熱を有していた」

思わず息を呑む。オレンジの光を真っ直ぐに見つめる男は、からかうように指を振った。

「……隕石、ですな」

「世界中の天文学者と地質学者がフランスに集まって、あつという間にその実態は解明された。ガリレオから遠く離れて、ここにやつと間違いが正されたんだね。」

北野さんも社長も、わからなくて当然さ。何百人ものプロが揃って、検討に値しないと思ったような案件だもん。一見すごく馬鹿らしい設問だもんね、『空から石が降ってくる』なんて、さ」

「ええ。……なぜぞか、意地悪クイズだと思つてました。まさかちゃんと答えがあるとは思わなかった」

「プロフェッショナルって、そういうものなんだよ。とつぴに見える凄い理論は、実ががちがちの常識の上に立っているんだ。当たり前のことをしっかり認識することから、彼らの仕事は始まっているんだ」

「常識を疑うのは、田之上さんの仕事だと？」

「何でも屋の手広さでわかることもあるんだよね、残念ながら。」

でも、もちろん専門家を信じることが一番大切だよ。

隕石の存在を信じなかったから、リンゴが木から落ちるのを不思議に思わなかったから、プロを馬鹿にするなんて、それこそ馬鹿のやることさ」

何故か照れくさそうに、田之上は口ごもった。考えてみれば、私は彼が自分の仕事について語るのを見たことがない。

単純にそういう男なのだ、と思っていたのだが、もしかして違うのだろうか。ううん、きっと違うのだろう。

「何でも屋」と自称する内に、とても強固なものがある。彼もまた、仕事が終わるのが寂しい男なんだ。

「……成田さんは、『空から石が降ってくる』ことは信じなかったでしょうね」

「うん、僕もそう思う。けど、僕は、彼が『隕石』のことを知って、悔しがったとは思わないんだ」

「そうですか？ 思いもよらなかった真実なんて、すごく悔しいじゃないですか」

「その気持ちもわかるんだけど……でもね、十九世紀の科学者たちは、『隕石』の存在を聞いて、きっと喜んだと思っただよ」

「どうして？」

「これでまた一歩、真実に近づける——って」

アイスのへらを煙草か何かのように啜えて、彼は笑った。とくいげに指を立てて脚を組む姿は、名探偵気取りの若造そのままだ。

ふざけた格好に似合わない視線が、ダーク・オレンジに消えて——今日の仕事は、終わった。